

原民喜、被爆体験作家 一戦前の人間像

ウルシュラ・ステイチェック

1. 序

原民喜が、日本の「原爆文学」の被爆作家の間でもっとも代表的な「原爆作家」とであると筆者は強調したいのである。確かに、「原爆文学」と考えたら、井伏鱒二や大江健三郎という名前は直ちに浮かび上がるが、実はこの広島出身の原民喜は「被爆体験作家」として最も早く広島の悲劇について書いた作品を出版したのである。この悲劇の故に、彼の多くの作品のテーマは、人間の弱さ、あるいは人生の惨めさ、苦悩などが主なテーマとなったのである。広島の大惨事を経験することによって、戦後一層深くこのテーマに関わっていくことになる。特に彼の作品には、極限状況に置かれた人間の姿がよく現われている。例を挙げると、死によって限界づけられた人間存在の意味を問うことである。原子爆弾の投下によって人間の生命が自然にそむいて途中で絶たれたり、不治の病に罹ったりするといった、生死のぎりぎりの状況に人間を置いて、その人間の存在の意味を問うこともある。

ところが、この「原爆作家」はすでに戦前から、人生における存在不安に関する多くの作品を書いていた。この小論では民喜のいくつかの作品を通じて彼の人間存在の不安やキリストの神の意識や予言的な発想などに注目する。戦前における彼の人生と文学活動は戦中・戦後に遭われた惨めさと繋がっていたことを示したいと思う。生まれてから死ぬまで悲しみや苦悩が民喜の人生に付き纏っていた。戦前に想像力を使って不思議な世界を語った多くの短編小説を書いたが、戦後には、空想の作品ではなく、彼の想像力を超えた現実についての作品を創作した。ヒロシマが誰でも想像力を超えた現実となったからである。

2. 被爆作家の人間像

広島生まれの原民喜は、すでに若いときに広島を離れて東京で勉強したり、仕事をしたりして、また戦前・戦時中に作家として活動したのである。1933年に結婚してからは、彼の最大の親友である妻貞恵が彼の側にいた。しかし、1944年9月にその愛妻が病死して、精神的な支えは消えてしまった。関東地方でしばらく孤独な生活をしたが、生きる目的がなく、民喜は千葉市の家をたたみ、1945年2月に広島市鞆町に住んでいた兄信嗣のもとに疎開した。そして、その半年後に原爆投下を偶然に経験した。民喜は元来小説家ではなく、むしろ俳人・詩人として活動したが、その広島で、突然彼の人生が変わってしまった。彼はいわば作家としての自らの使命を果たすために、1946年春まで、つまり8ヶ月の間広島の郊外に住んで、その経験を意識的に描くことにしたのである。彼の作品、短編小説、詩の雰囲気はとても生々しくて、恐ろしい。原爆投下の後の異常な風景が作家の鋭い目で描かれている。

詩人でありながら、彼の目はすでに「記録文学」の作家の目にもなっている。小説や詩に現われるこの特別な詩的雰囲気は、残酷な言葉を使っているために、大変写實的に響いている。時には激しい言葉が詩の中から溢れるように、また時には静かな声で泣いているように感じられる。このような詩的効果は、他の作家とは少し異なり、民喜個人の惨めな運命にも起因している。愛妻を失って、郷里広島で救いを求めるために、家族のもとに帰ってきたが、そこで家族からよりひどい扱いを受けた。

そのような惨めな人生を長く生き続けることはできなくなった。広島原爆投下の後、彼は6年しか生き延びなかった。彼は、作家としても、また人間としても恐ろしい記憶に満ちた孤独な人生を、自ら終えたのである。

3. 戦前における作家の人間像

原民喜の人生は、その生まれた時からすでに戦争との関わりが強かったと言える。生まれたのは、1905年11月15日であった。1904年に始まった日露戦争は1905年9月15日のポーツマス（Portsmouth）条約¹により日本側の勝利に終わった。このちょうど2ヶ月後、民喜は生まれた。勝った戦争で日本の民が喜んでいたので、生まれたばかりの赤ん坊は「民喜」と名付けられた。²原家は陸海軍御用商人の家で、軍服製造などの軍需産業によって繁盛した。経済的に豊かな生活で広い敷地に縫製工場を持っていたのである。この恵まれた環境に民喜は、五男として誕生した。そして、兄弟姉妹が多かったが、12人のうち3人は夭折したのである。その大勢の家族のうちもっとも細やかに民喜を世話したのは、彼より8歳上の次姉のツル（鶴）³であった。子供の数が多かったので、母親は忙しくて、民喜の面倒を見る役割をツルに与えた。彼女は、民喜にとって最も重要な存在であり、彼を大人の世界に導き、さらに自分がクリスチャンであったので、弟にキリストの教えを紹介したのである。民喜自身はクリスチャンにならなかったが、姉のおかげでその宗教の概念を知っていたのである。彼の作品をより深く理解するために、その背景を知らなければならないのである。

すでに言及したように、民喜は1933年3月に結婚した。2年の間に書かれた64編の作品を『焰』という作品集に収めて、1935年3月に白水社より自費で出版した。『焰』はきわめて短く断片的な「掌編小説」と呼ばれている小品集である。その作品を考えると、確かに彼の結婚生活にも関わるが、その内容に主な影響を与えたのは、1934年5月に原夫婦が逮捕⁴された事実とこれに関係した情勢である。非常に暗く憂鬱な作品に登場する人物たちは、民喜自身のような性格、個性を持ち、絶望的な環境に住み、恐ろしい顔つきをし、不思議な態度をとって重苦しい考えばかりを抱いている。絶望的な未来を見つめて、怪しい行動をする主人公たちは、何となく当時の知識階級の言行を連想させる。彼らは、民喜と同様に、＜自己分裂症＞や＜内向癖＞に罹っているのである。また、主人公たちは病気に對する不安感に陥ったり、あるいはすでに重病を煩ったり、自殺の決意をしたりするなど、最悪の状況に置かれている。

ここで、民喜の生涯の中で重要な出来事の一つに言及しなければならない。彼は1932年3月に慶応義塾大学を卒業してから、多額の金を払ってある遊女（「本牧の女」）を身請けし、1ヶ月ほど同棲した。しかし、彼女に裏切られ、人間不信に陥って、この年の初夏、友人である長光太（ちょうこうた）

1 ポーツマス条約—1905年、アメリカのポーツマスで調印された、日露戦争の講和条約。日本側全権小村寿太郎、ロシア側全権ウィッテ。朝鮮における日本の優越権の承認、関東州租借権・長春～旅順間の鉄道・南樺太などの日本への譲渡、沿海州の漁業権の許与などを規定した。

2 原民喜の幼年時代と少年時代について、また彼の家族については「死の陰の存在—原民喜私論」（『比較文化研究』第17号／1994）に筆者が詳しく論じている。

3 次女のツルは1897年12月生まれ、若くして金樹義夫と結婚した。

4 原民喜は、結婚してから妻に励まされて創作活動に情熱を注ぎはじめることとなった。ところが、1934年の春、東京に住んでいた頃、昼間寝て夜活動するような生活を送っていた彼は、かつての大学時代の左翼運動への参加も相俟って、特高警察に疑われて逮捕され、夫婦共に約30時間の拘留に遭った。そのショックから逃げ出すようにして、その直後、彼らは千葉市に移住したのである。

宅の二階で薬を飲んで、自殺を図ったが、未遂に終わった。この自殺未遂の事件は彼の人生の終わりまで影響を与えたと思われる。

(1) 「焔」

『焔』に登場する主人公たちに、民喜は自分自身の経験や自殺決意、さらに検挙、警察の取り調べ、無罪の人物に対しての警官の迫害、さまざまな屈辱やいじめなどの苦しみを反映させた。しかし、『焔』のさまざまな主題の中で、家族についての話がただ一つある。これが作品集の表題ともなっている「焔」である。このもっとも自伝的な短編小説は、民喜の少年時代の経験を物語る作品である。11-13歳の民喜にとって、「焔」で言及された1917年の父親の死⁵、あるいは1918年の最愛の姉ツルの死は大きな衝撃であった。また、その1年の間に彼は学業にも失敗した。⁶

当時民喜は姉ツルから聖書のお話をよく聴いて、二人は信仰について話し合った。聖書は彼の考え方に強い影響を与えたと思われる。中学校の入学試験に落第したのは、若い民喜にとって最大の悲劇であったが、姉に教わったキリストの話のおかげで、いくらかでも残酷な人間を忍び得るであろう、と「焔」の主人公である康雄は希望している。語り手である民喜は自分を康雄と名付けて自分自身の生活について話している。彼は先行きに不安ばかりを考えたが、結局「中学校が一年遅れたこと位どうだつていいぢやないか」⁷と自分を慰めている。入学試験の失敗、愛する姉の死、その後学校の同級生との年齢差と身体の弱さのためにいじめられるといった数々の問題は、彼の世界観と価値観を独自のものへと形成していった。少年の民喜は、最も身近で大切な存在としてのこの二人を亡くしたことで、精神的な支えを失うことになった。ちょうどこの年齢の時期は、人間の精神形成史には、きわめて重要な意味をもつと考えられる。若い民喜は、内面的にも外面的にも、刺激を強く受け、精神的に混乱し、感情の揺れが大きくなった。このもっとも重要な時期に大変な体験をすると、全生涯に影響が残るのであると思われる。青年の民喜にとってこの悩みに対してバランスを取る助けとなったのは、聖書を読むことであると筆者は推測する。

「焔」の構造全体に聖書のお話が拡がっている。冒頭の部分をはじめ、多くの短いエピソードの中を、つまり作品全体を、姉に教わったキリストの存在が貫いている。実は聖書のお話はこの小説だけにある。それ故に、この作品は重要な手掛かりとなるのである。少年時代に最も尊敬した姉ツルの思い出をきっかけにして、聖書のお話をするのは、確かに偶然ではなく、聖書の影響は大きかった、ともう一度筆者は主張したい。さらに、戦前・戦時中の父親、姉、妻という最愛の三人の死に対して、戦後に見た大勢の死の理由付けを、聖書を通して探していたのではないかと筆者は考える。

「焔」に登場する姉と主人公である康雄との相互関係を見る。作品の核心は、康雄に与えられた彼女の愛情および信仰の教えの解釈であり、また姉の病死の前後状況の描写である。民喜の実際の姉ツルは、金柁義夫と結婚した後、僅か21歳で腹膜の結核で亡くなったが、原家に残されている手帳によれば、正確な死亡日は1918年6月24日である。「腹に水の貯る病気で死んだ」⁸のであった。ちょうど民喜は中学校の受験に失敗して、小学校高等科に通っていた頃であった。死というものに怯えながら、その夏蓮華町にある姉の墓の辺りで彼女の幽霊に遇った。「よくものを怖れた姉、まさかその姉が幽

5 父親、原信吉は1866年に広島に生まれ、1917年に胃癌で亡くなった。

6 1918年の春、広島高等師範学校付属中学校の入試に失敗して、同年に付属小学校高等科に入学する間に、姉ツルの病氣と死に遭遇した。

7 『定本原民喜全集』一卷、青土社、1978、p.138.

8 *ibid.* p.142.

霊になりはすまいが、康雄は不思議な気がした。彼の父は姉より二年前に死んでゐた。つぎつぎに死ぬる、死んでどうなるのか。天国を信じようとしても、もう以前のやうに気持がすつきりしなかつた。』⁹少年の康雄は、愛する人の死を理解することはできなかつた。自分に弁明するために姉に教わった信仰を参照している。康雄は、姉の語った聖書の話によって神の愛、信頼、従順、また他人に対しての尊重、愛、誠意などの尊い観念を抱くことにした。亡くなるまで病室にいた姉は、彼に次のことを教えていた。

康ちゃんのいけないのは何だと思ふ。さあ、沢山あると思ふ。そのうちでもよ。さあ。忍耐強くないことよ。さう云つて姉は大切なことを説き出した。それが何時の間にか、アダムとイブの伝説に移り、キリストの話になつてゐた。汝の敵を愛せよとキリストは仰つたのです。大きな愛の心でこの世を愛すると、何も彼も變つて来ますよ。¹⁰

優しい姉の言葉は若い康雄の心に残つたのである。すでに死病に罹っていた彼女のイメージはキリスト教の天使のように見える。「青空のやうに澄んだ眼をした」姉はまるで西洋の聖人のように感じられる。愛する者に従わなければならなく、「これからは何でも忖へる、姉さんの云ふ通りにならう」、¹¹と康雄は決心している。病院から帰る途中で紅く染まった雲をみて、「神様でものはあつたのだ」と神の存在を認めはじめて、「長い間の疑問が解けて来た」のである。家に戻りながら、「始めて密かに祈つた」。姉の言う通りすると、彼は礼儀正しくなり、兄弟と喧嘩せずに素直になつたのである。さらに、キリスト教の習慣を身に付けて、「三度の食事の前に祈り、朝夕も祈つた」。康雄の振る舞いと姿勢を見ると、彼にとってキリスト教の概念がかなり大きな憧れであつたと考えられる。康雄は、死んだ姉によって奨められた『クオ・ヴァディス』¹²とバイブルを（「康雄のポケットからはバイブルが出て来た。」¹³）いつも持ち歩いていて、また歩きながら祈っていた。しかしこの若い少年には、姉の難しい話の理解がしにくく、聖書の言葉に対して「姦淫でどう云ふことなのか、康雄は変な気がした」¹⁴のである。あるいは「イエス・キリストよ。ヨルダンの河でどんな河なのかしら」¹⁵と悩んでいる。姉が康雄にとって憧れの存在であつたので、彼女のおかげで、彼はキリストの神を深く考えはじめたのである。だが、彼女が<不審な死>を遂げたことは、若い康雄の心に大疑念を起こさせた。姉の死のために彼の人生における最も強堅な精神支柱が失われた。この死は神からの罰なのではないか、と康雄は考え出した。学校の失敗、同級生からのいじめなど、そして「康雄はどうして一人残されたのかまだ不審だつた。（略）すると、僕は賊なのかしら。すると、僕は知らぬ間に賊になつたのかしら」¹⁶と自分を責めて悩んでいる。

9 ibid. p.142.

10 ibid. p.138.

11 ibid. p.138.

12 “Quo vadis” (1896) はポーランドの作家であるヘンリク・シェンキエヴィッチ (Henryk Sienkiewicz, 1846-1916) によって書かれ、1905年にノーベル文学賞を受賞した。日本での最初の訳は木村毅譯であり、1928年に新潮社より出版された。他の訳は梅田良忠訳であり、また2000年には吉上昭三訳が福音館書店から出た。この長編小説は古代ローマ時代における最初のクリスチャンの生活についての物語である。

13 ibid. p.140.

14 ibid. p.141.

15 ibid. p.137.

16 ibid. p.141.

確かに、彼には聖書の話が難しく、心の中で非常に混乱させられた。少年らしい悩みを抱きながら、例えば「イエス・キリストよ、何故中学校なんかあるのかしら、天国にもやはり学校なんかあるのかしら」という考えをはじめ、「世の中は罪悪だらけらしい」というかなり大人のような考えかたを持っていた。

さらに、元々仏教の文化の中で育てられた康雄には、死んだ姉の魂がどこへ行くのか分からない。「康雄は姉が天国へ行くのを懐つた。しかしそこは真宗の寺だつた」¹⁷と混乱している。作品の最後の場面を見ると、やはり、姉が彼とは違う世界にいることを康雄は想像している。姉の死んだ日からおよそ一年間経って、康雄は新たに勤勉に受験準備をしているが、姉のことが絶えず心に浮かんでくる。勉強中に不思議な夢を見ている。「神様、僕に最良して試験を合格させ給へ。(略)羽根が生えたら天使ぢやないか。天使の顔はみんな女で、眼なんかまるで夢のやうだ。(略)大きな波と波の谷間に人魂が出た。その青い光が姉の顔になつた。姉さん、御免よ、一何を詫びてるのかはつきりしない。」¹⁸というのは、死んだ姉がクリスチャンの世界にいる天使として見られている。民喜自身も姉の宗教を非常に尊重していたと思われるが、自分がキリスト教徒にならなかったのである。この問題の展開は後で論じる。ここで、この問題に関連する、康雄の最後の言葉の意味を少し考えてみる。「姉さん、御免よ、一何を詫びてるのかはつきりしない。」死んだ姉に向かって謝っているが、何を謝るのははっきりと分からない。彼女と同じように信者にならないことかもしれない。ツルが死んでから、彼女を<裏切り>、もはや信仰のことに熱心にならないことかもしれない。

最後に、もう一人の登場人物について一言述べなければならない。康雄の仲間の一人である高は、噂によれば孤児であるが、聖書を持っている。おそらく信者であるかもしれないが、彼の信仰には隠された秘密があるのであろう。「それで君は信者かい。ううん、ちがふよ。高は青白い顔にぼんやり淋しさうな笑みを浮べた。」¹⁹民喜の物語の中に登場している信者、つまり姉と高は、非常に優しく、敏感で、何となく性格がより立派でありながら、二人とも惨めな運命に遭遇している。姉は病気で死ぬことになり、高は孤児である。それでは、1935年頃に「焔」を書いた民喜の宗教に対する気持ちはどうであったのか検討するために、彼の人生における十数年前の<文学的な出来事>に戻って、論じなければならないと思われる。

(2) 『ポギー』

民喜は、小学校6年の時(12歳)、1917年8月に家族に励まされて、兄の守夫²⁰と二人だけで手書きの原稿を綴った回覧雑誌を作っていた。<『ポギー』一号>と名づけた創刊号が出て以来、途中で『セレナデ』、『沈丁花』、『霹靂』と改名したりして、1928年9月まで続いた。『ポギー』の最初の頃、父親の死、姉ツルの病気と死、さらに、入学の失敗などの辛い体験があった。民喜は、1919年4月に(14歳)広島高等師範学校付属中学校に入学した。長光太の思い出によれば、当時民喜はきわめて無口で、五年間、同級生にほとんど声を掛けたことはなかったのである。その代わりに、作文を書くことに力をいれて、さらに中学校の2年生になってから、とくにチェーホフ、ツルゲーネフ、トルストイ、ゴーゴリ、ドストエフスキーなどの19世紀ロシア文学の作家を読んだ。1920年9月(15歳)、守夫と共に『ポ

17 ibid. p.141.

18 ibid. p.145.

19 ibid. p.139.

20 原守夫は四男として生まれ、原家と原民喜の主な遺品を引き継いでいる原時彦の父親である。

ギー』三集、翌1921年『ポギー』四号を出した。大学に入るまでに夢中で外国文学（ロシアの小説家、フランスの詩人たち、例えばヴェルレーヌ）、また日本の詩人である室生犀星（1889-1962）、志賀直哉、島崎藤村の本を読んでいた。彼らは民喜の文体や考え方に最も強い影響を与えたそうである。1924年に東京に引っ越して、慶応義塾大学文学部予科に入学し、1929年4月同大文学部英文科に進学した。特に大学の予科時代にさまざまな同人雑誌である『少年詩』や『四五人会誌』に投稿したり、積極的に詩を書いたり、はじめて俳句を作ったりした。²¹

『ポギー』三集に戻る。民喜にキリストの教えを紹介した姉は、二年前（1918年）亡くなった。13 - 15歳の民喜の心は彼女の死を受け入れられず、神の存在を疑って、絶えず乱れていた。その結果が『ポギー』三集によく現われている。子供であるにもかかわらず大人びた人生の悔悛を抱いて、人生の苦しみをよく経験した詩人のように書いている。『ポギー』三集に載せた宗教に関する二つの詩に注目する。短い「キリスト」という詩について小海永二は次のように書いている。「キリスト」の中に「繊細な詩的感覚を読むことは容易である。だが、それだけではなく、十四、五歳頃と云えば、特に早く人生に眼覚めた少年にとっては、敏感に外界の刺戟に反応し手探りで自己の方向を求める時期である」²²。民喜が自分の信仰に関してどのように書いているか見る。

キリスト

ある晩大きな月が出た。
出たと思ふともう消えた。
たつた一寸の間でも
月見た時の心持は
消えない消えない。²³

かなり象徴的な詩であるが、その「心持」という言葉は信仰に関する暗示された表現であるかと推測する。美しい月が出たとき、詩人は感激しているが、この美しさは瞬間的なものであり、直ちに消えてしまう。しかし、彼の〈心持〉はそうではなく、〈消えない〉という言葉を手繰り返すことで、彼の本当の確信を強調していると思われる。小海永二も『「キリスト」』を書いた頃はまだキリスト教から離れていなかったはずだ²⁴と主張している。

「キリスト」に展開している信仰の告白に対して、『ポギー』三集に載せたもう一つの詩の意味を考えてみる。これは「もだえ」である。すでに題名自体が重苦しい気持を表しているようである。先ず、小海永二の意見を引用する。「そうした人生の憂悶のようなものが、この詩を書いている少年の胸にたちこめていた。」²⁵この詩を書いたのは15歳の少年ではなく、かなり成長しきった詩人であるかのように感じられる。まずこの詩を引用する。

21 民喜の少年・青年時代については、民喜の伝記作者、小海永二が『原民喜—詩人の詩』（国文社、1984）の中で詳しく書いている。また、民喜の学生時代における文学活動については、藤島宇内と小海永二が『原民喜詩集—日本現代詩文庫100』（土曜美術社出版販売1994）に書いている。

22 小海永二『原民喜—詩人の詩』、国文社、1984、p.42。

23 『定本原民喜全集』一卷、青土社、1978、p.689。

24 小海永二『原民喜—詩人の詩』、国文社、1984、p.47。

25 ibid. p.42

もだえ

神よと叫びし我が声は
 春の霞に先だちて
 我は正しき聖道を
 たどり登りて夏は来ぬ。
 心は乱る五月雨
 降りては止みて我が憂
 はれぬ日もなし梅雨の空
 神は何処にましますや
 大空高く月出でて
 夕の雲のおさまらず
 我はみ空を仰げども
 あゝ我が神はそも何処
 神と別れて吾はたゞ
 淋しき悲しき悲し暗き路
 たどりて往けど路遠し
 神の救の御手もなく
 空くきゆる朝の星
 きへぬるもだえ……²⁶

完全に「キリスト」に逆らって、ここでは神の存在さえも拒絶している。神からの救いもなく、神は彼の声を聴こうとしないのである。〈春の霞〉は姉の不審な病気に関連して、〈正しき聖道をたどり登りて〉というのは、自分が信者になろうとしたという決心を暗示している。〈夏は来ぬ〉、〈五月雨〉、〈梅雨の空〉などの表現は6月に死んだ姉のことや彼自身の気持を表している。「もだえ」では、空に広がっているのはただ星や月だけである。神の存在が消えたからである。神を探し、目で空を仰いでも、その神はいないのである。残っているのは、「キリスト」に登場した〈心持〉の〈もだえ〉だけである。彼の信仰は姉と同時に亡くなり、この〈神と別れて〉しまったことは彼にとってとても〈悲し〉いこととなり、〈淋し〉いこともなる。神のない〈路〉つまり人生は〈暗き〉ものとなった。結局、民喜は姉が死んでから、神に裏切られた子供となったように感じられる。確かに、このような解釈は、キリスト教徒である筆者がしているが、この詩からは〈神のない人生は淋しい〉という含意が読み取れるのである。

民喜はもう一度、1921年の『ポギー』四号で聖書的话题に戻った。これは「槌の音」という短編である。全体に非情で重苦しく、すでに「もだえ」に書いた人生の憂悶のようなものが立ち込めているという特徴のある物語である。このような解釈を小海永二が行っているが、筆者はこれに同感しながらも、この作品を宗教的な側面から分析すると、もっと深い意味が暗示されていると主張したい。姉は亡くなるまでキリスト教の信者になるように民喜を説得していた。しかし、彼女が病気で死んだので、民喜は神に対する信頼を失って、神のイメージを「もだえ」のようにしか表さなくなった。

まず、作品の内容を簡単に説明する。戦後の作品にもよく登場する名前、省三は治療できない病氣

26 『定本原民喜全集』一卷、青土社、1978、p.689.

で入院している。小学校の教員として働き、昔から元気でよく酒を飲んだが、3年前に倒れて、次第に彼と彼の家族の生活は苦しくなってきた。体はますます弱っている。「身体の衰弱と共に省三の記憶力も意志も感情もすつかり衰へてしまつて今は何の思慮もない何の感情もない赤児同様であつた。」²⁷ 省三は絶望に陥って、何も感じることはできなくなった。時間の感覚は無くなって、側にある花の香りを感じなくなり、空の色も見えなくなった。目が覚めていることも、眠っていることも、彼にとって全く同じ感覚である。「省三は眠つても夜でないといふことに眠れなかつた。夢も見なかつた。夢やら眠りやら解らないくらくらした心持の中に不幸な自身と、自身の病苦とを、世のすべてを忘れて居た。」²⁸ 死にかかっている中年の男性は、心臓が弱く響き、「死の暗黒の底に冷たい」体が落ちていく感覚がある。「高い断崖悲しい絶望の崖からつき落されようとして居るのだ。」その時、自分の体だけではなく、魂はどこへ行くのかと心配している。「彼が肉体が²⁹死によつて消されたら彼の靈魂はどうなるだらう。」その悩める体にくっついていく靈魂は「既に彼の身体を去つて空間を飛び廻つて」³⁰ いるように省三は想像している。ベッドに横たわって、隣の部屋から聞こえる話に耳を向けている。妻と郵便局で働いている娘の喧嘩をぼんやりと聞いている。母親は、娘が給料を無駄に使ったことを反省するように要求している。最初は強く言った母親だが、自分が一生苦勞していたから、娘にはそのような人生を送って欲しくないのだと謝っている。

聖書と関わりがあるのは、「槌の音」がマタイによる福音書³¹からとった有名な言葉を題辭として始まっているからである。³² その福音書の内容と作品自体の内容は相互に補いあっていると思われる。小海永二は「槌の音」が<宗教小説>であるのか<社会小説>であるのかと迷いながら、民喜が引用していない部分と関連付けて、自らの推論を展開している。民喜によって引用されなかった聖書の一部を、日本語の現代文の翻訳で見てみる。「それはみな、異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存じである。何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。」³³ その考えの続きは、明日のことを思い悩まないことである。なぜかという、「その日の苦勞は、その日だけで十分である」からである。それでは、民喜がこの部分を引用しなかったのは、何故であろうか。小海永二によれば、「この不幸な省三一家は果してそういう信仰の中で救われるのか。この小説の中には作者の解決法を提示してみせるような部分は一つも見つからない」のである。さらに、小海永二は、省三のくらくらした気持の中に>「一種の宗教的な安心感がひそんでいると云おうとしたのだら

27 ibid. p.693.

28 ibid. p.694.

29 ママ

30 ibid. p.695.

30 ibid. p.695.

31 小海永二はこれがマタイ伝ではなく、ルカ伝第12章であると主張しているが、これは誤りで、民喜が書いているように、この題辭はマタイによる福音書6.26-31、すなわち「思い悩むな」の一部である。しかしながら、小海永二の間違ひは根拠のないものではない。ルカによる福音書12.22-31、すなわち「思い悩むな」は内容的にはほとんど同じである。

32 「汝等天空の鳥を見よ。稼ごとなく糶ごとを為さず倉に蓄ふることなし。然るに天の父は之を養ひ給へり爾等之よりも大に勝る、者ならず乎。

爾曹のうち誰か能くおもひ煩ひて其生命を寸陰も延得んや。また何故に衣のことを思い煩ふや野の百合花は如何にして長つかを思へ。勞ず紡がざる也。われ爾曹に告げんソロモンの榮華の極の時だにも其の装この花の一に及ざりしなり。神は今日野に在りて明日焔に投入らるゝ草をも如此よそはせ給へり。況て爾曹をや。呼鳴信仰うすき者よ。然らば何を食ひ何を飲みなにを衣んと思ひ煩ふこと勿れ。」[in: 『定本原民喜全集』一巻、青土社、1978、p.693.

33 『聖書―新共同訳』、Japan Bible Society、東京1990、p.11.

うか³⁴と懐疑を抱いている。彼はその考えを続けて、16歳の「民喜にはすでに信仰に対する幾許かの疑問が出始めていたのではないだろうか³⁵と少し疑っている。あるいは民喜の関心は、宗教的な問題から離れつつあり、次第に「社会主義的な思想」に近寄っているとも見える。省三のような人間の悩みに対して、聖書の言葉を借りて、「神の国と神の義を求めなさい」と言うだけでは、また神からの救いを求めさせるだけでは足りないのではないであろうか。言い換えれば、宗教は少なくとも民喜（省三）にとって救いにはならないのである。民喜の「少青年期の純粋な魂は、巧まざる正義感をおびる」ものである、と小海永二は民喜の性格の細部に論及している。結論として、小海永二の考えに従えば、「槌の音」は＜宗教小説＞というより＜社会小説＞の方に近いのではないかと推測することができる。

少年の民喜における宗教・社会主義に関する考えを、小海永二のように解釈することもできるが、キリスト教徒である筆者の解釈を少し異なる角度からしてみたい。16歳の民喜が社会の悩みを極めて鋭く判断するのは、彼が非常に優秀な青年であったことを示している。しかし彼は、社会問題に敏感であるだけでなく、人間そのものにも関心を持っている。省三が寝ている隣の部屋では親子の激しい争論が行われている。夫の病気で経済的に苦しんでいる妻は、娘の前で自分の「一生苦勞」を告白している。短篇の最後の場面にもなる喧嘩の最後で、妻は次のように言う。「だけど妾の一生の頼みがあります。どうかこれ度は守つてしたがってください。ねえ、お前、お前は随分理屈は言ふけど妾は喜しくはないよ。それは理くつを云ふのもよからうがお前どうか人間として人情のある人になつておくれよい……」³⁶彼女の言葉は「槌の音」の冒頭で引用されている聖書の一文に直接関連している。ここで、民喜が引用した一文ではなく、現代日本語訳の聖書を参考にしてみる。死病が攻めてくる悔しい人生の中、また経済的に苦しい人生に対しては、「『何を食べようか』『何を飲もうか』『何を着ようか』と言って、思い悩むな³⁷という神からの保護の約束がある。このような現世の悩みは、大したものではない。病気に遭っても、お金が無くても、それは心配事ではないのである。大事なのは、「人間として人情のある人」になることだけである。死にかかっている父親は、このような願いを含んだ話を聞けば、安心して死ぬことができるのであろう。「省三は目を開けて空間を見て居たが彼等の話は聞いたか聞かぬか解らない顔附で居た³⁸と民喜は書いている。筆者の解釈によれば、ぼうっとしているように見える省三は意識的に親子の話に耳を傾けているのである。つまり、人間が聖書の言葉に従えば、世の中にまだ希望があるというメッセージが読み取られることができると筆者は思う。その希望が人間の心の中で消えることなくずっとあり続けて欲しいという念願が、民喜の戦後の作品も貫いているのである。

さらに、「槌の音」にはもう一つの宗教的な要素が見えると思う。死の前に立たされている省三は「肉体が死によつて消されたら彼の靈魂はどうなるだらう」と考え込んでいる。＜靈魂はどうなる＞という考えがキリスト教的だけとはいえないが、キリスト教徒と同様に彼も、自分の魂の行き先のことを心配している。死後の世界はどこにあるのか、魂はどうなるのかといった、すでに現世の悩みではないものが省三の心を奪っている。もちろん、仏教にも似たような考えがあるが、キリスト教の信者は死後、魂が身体から離れて、神が再び復活する天国に行つて待つていることを信じている。

34 小海永二『原民喜—詩人の詩』、国文社、1984、p.47.

35 ibid. p.47.

36 『定本原民喜全集』一卷、青土社、1978、p.696.

37 『聖書—新共同訳』、Japan Bible Society、東京1990、p.11.

38 『定本原民喜全集』一卷、青土社、1978、p.696.

最後に、民喜の文体について一言述べなければならない。16歳の彼は、深刻な主題をいながら、自分の感情をあまり露に表出することなく、適確で冷静な描写技術を使っているのである。例えば、主人公の病状の描写にこれが見られる。「省三は眠つても夜でないといほとんどに眠れなかつた。夢も見なかつた。夢やら眠りやら解らないくらくらした心持の中に不幸な自身と、自身の病苦とを、世のすべてを忘れて居た。」³⁹この特徴はその後も、原爆後の記録を書いた「廃墟から」などの作品によく現われている。「槌の音」を淡々と書いた、迫力を持たない描きぶりは、戦後のいくつかの作品と同質のものである。

無口な民喜は、心の中の悩みを口で打ち明けることより紙に向かってよく書いていた。「槌の音」以後は、少年・青年期に散文を書いたかどうか不明である。その時期から1935年に『焔』を刊行するまで残されている作品はほとんどが詩、俳句である。

(3) 『死と夢』『幼年画』と「曠野」

1935年に自費で出版された『焔』以外は、戦前には民喜は自作集を発表したことはない。しかしながら、1936年から1939年にかけて特に『三田文学』にたびたび寄稿するようになり、「もっとも旺盛な創作力を示」⁴⁰した。この時期に、1944年秋になってから二つの作品集としてまとめられた多くの短編小説を書いた。その作品集とは『死と夢』と『幼年画』である。1949年4月号の『群像』に発表された「死と愛と孤独」というエッセイの中で、民喜は全部の文学活動を省みて、自作を三つの作品群に分けている。一番目は「死と夢の念想にとらわれ幻想風な作品や幼年時代の追憶を描いてゐた」作品群であり、二番目は「『夏の花』『廃墟から』、など一連の作品で私はあの稀有の体験を記録した」作品群であり、そして三番目は「戦後の狂瀾怒濤は轟々とこの身に打寄せ、今にも私を粉砕しようとする。『火に踵』『災厄の日』などで私はこのことを扱つた」⁴¹作品群である。民喜の義弟である佐々木基一の回顧によれば、民喜は妻貞恵が病死したばかりの1944年の秋頃に、30年代に書いた作品をまとめ『幼年画』（9編の作品群）という題名をつけた。この時に『死と夢』（10編の作品群）も出来上がったのである。先に述べた一番目のグループはこの『幼年画』と『死と夢』に関連している。

1939年秋の妻貞恵の発病までは、民喜は熱心に作品を書いたが、その後は文学活動にほとんど力を入れず妻を自宅で看病したり、1944年の夏からは千葉大学病院へ二日毎に通ったりしていた。

「焔」以外の作品の中で民喜は信仰、聖書と宗教全体について直接には、もはやどこにも書いていない。1917年の父親の死、1918年の姉の死、また1936年の母親ムメ⁴²の死に関する作品は圧倒的に多い。それから民喜は近親者の死についてだけでなく、自分の死あるいは死んでからの世界をたびたび描いているのである。亡くなった姉や母のところを訪問したり、生者の世界を自分が亡くなった視点から観察したりするのは、民喜の好んだ主題である。

一般的に<死>というのは、恐ろしいイメージをしていて、苦悩と強く関係しているが、民喜にとっての死、あるいは死のイメージは非常に奇妙に語られている。<死>と<夢>または<死の幻想>と<夢の幻想>が相互に錯綜している。すでに作品の冒頭部分から、夢の中の出来事なのか、あるいは主人公がもう亡くなっていて、生きている者の世界を訪ねているのか、などの疑問が絶えず生じるのである。現実の世界、また現実らしい世界は、物語の中で突然まるで非現実の世界となり、恐怖に満

39 『定本原民喜全集』一巻、青土社、1978、p.694.

40 年譜[in:]原民喜『夏の花・心願の国』、新潮文庫、1973、p.261.

41 『定本原民喜全集』二巻、青土社、1978、p.550.

42 ムメは1874年に広島市胡町、久保壱兵衛の次女として生まれ、1890年に信吉と結婚し1936年に死去した。

ちた幻覚となる。生きている主人公たちは、不意に10年前、20年前に、また1年前、2年前に死んだ者に変化しているのである。しかしながら、このような小説で楽しそうな幽霊が主人公として現われる場合は、明らかに普通の、滑稽でもっと楽観的な物語であると期待されるであろう。だが、民喜の作品の場合は、その一般の予想とは逆に、部分的にも滑稽味はなく、全く悲劇的な物語である。⁴³主人公たちが亡霊や幽霊となったりすること、あるいは死者たちが身体を持っていることは、民喜自身の自閉症の問題を象徴的に描いているのではないかと推測される。言い換えれば、民喜は現実の人生で、生きているにも関わらず周りの人々に無視されていると感じており、そのことを自分の作品の中で自分を死者として描くことによって表している。彼にとっての〈死〉の概念は、ときに遊びのように筆者に感じられる。さらに、死はその描き方自体が恐ろしくても、民喜には非常に身近なものであったように感じられる。この考えをもっと展開していき、死が民喜の憧れの状態ともなったような作品もある。⁴⁴彼の死についての物語は、読者を不思議な世界へ導くものである。その世界では、まるで夢のように、総てのことが可能である。

民喜が死について書くとき、確かに彼はその死自体を恐れていたと推測できる。その上で、彼にとって父親、姉、さらに母親がいるところは憧れの場所であったであろう。しかし、30年代の半ば頃に作品を書き続けた民喜の側には、もう一人の女性、つまり貞恵がいた。愛妻のために、彼はもはや死にたがらなかつたであろう。先に述べたように、30年代の後半に多くの作品が作られた。

民喜の関心は自分の家族だけでなく、第二次世界大戦の直前ヨーロッパやアジアに拡がっていた不安感、つまり死を起こす原因となる出来事にもあった。政治情勢と関わって、ちょうどその時期に「不安の文学」の時代はヨーロッパにも、また日本にも広がってきた。作家たちは反政府の作品を書くことと逮捕されるという危険な時期であった。30年代に全世界に起きた恐怖の現象について直接書くことはできなかったため、当時の作家たちは象徴的な語句、比喩などを使って語ったのである。民喜もその一人であった。すでに戦前の散文の中で暗号文のような文章や暗示的表現を利用して、その時代の悩みや不安感などを描いていた。具体的にいえば、政治・社会的苦悩、あるいはより普遍的な不安感、つまり人類の絶滅の予感さえも取り上げていた。この問題に関するいくつかの作品をしてみる。既に1935年に発表した『焰』の中の「霧」という小品に次のような発想があった。「人間最大の不安は死の恐怖であり、人類の続く限りこれは消滅しないから、一刻も早く全人類を撲滅さすに限る」⁴⁵と書いて、世界が次第に自滅の危機に直面しはじめると予感している。

さらに数年後、1936年に勃発したスペイン内乱の終わり頃に書いた作品を見てみよう。1939年2月号の『三田文学』に載せられた「曠野」は、非常に不思議な物語である。これも予言的な内容のある作品であると主張したい。⁴⁶唯彦という主人公は、死後に死者の美しい世界、天国のような平野を歩いている。新鮮な空気を吸い、嬉しそうな鳥の鳴き声に耳を澄まし、蝶や鳥を追いかけたり生物の健やかな成長を眺めたりしている。突然、彼の目の前でこの鮮やかな世界が減じはじめる。この壊滅的幻想は、数年後の広島原子爆弾投下の悲劇を連想させると筆者は思う。

突然、遠くの方で、ビューと凧の唸る音がした。と思ふうちに、もう叢はさわさわと戦き始めた。嵐になるらしい空は、しかし今不思議に冴えて美しかった。真綿のやうな薄雲が五色の虹をおびて軽

43 例えば、1936年の「行列」、1938年の「玻璃」、1939年の「曠野」である。

44 例えば、1938年の「不思議」「魔女」「迷路」「暗室」などである。

45 『定本原民喜全集』一卷、青土社、1978、p.18.

46 この問題を、筆者は1995年2月23日の『中国新聞』に載せた記事で述べた。(「『人類破滅』の予言者・原民喜」)

く浮んでゐる。ところが、その奥の方のもつと青いもつと深い空のところに、嚇と真赤な牡丹の花が燃え出した。あつと思ふうちに、その花は真黒な煙を吐き出して、形骸を失つてしまつたが、煙は忽ち唯彦の頭上まで伸び、空は濛々とした黄色なガスで覆はれた。唯彦は窒息しさうになつて、眼に涙が滲んだ。気がつくと、彼の周囲に生えてゐる草は、みんな真白に枯れて、それは枯木のやうに思へた。が、再びそれを注意すると、枯木はみんな骸骨になつてゐた。骸骨どもは風に揺れて、カタカタと鳴つた。その時、空が一層暗くなつて、無数の鶴が飛んで行つた。鶴の羽音が去つた時、急に静寂が立戻つたが、もうあたりは完全に闇と化してゐた。唯彦は茫然として闇の中に蹲つた。嵐は他所へ逸れてしまつたのか、今は何ものそよぎもなかつた。空を仰がうにも星らしいものの光はなく、すべてが闇と静寂に鎖されてゐるのだつた。唯彦は今居る場所がやはり狭い暗い墓の中らしいのを感じた。今迄身は軽ろやかに自在に空の下を散策出来たと思つてゐたのに、もはや己は闇の底に幽閉されてしまつてゐるのだろうか。⁴⁷

「曠野」は、ヨーロッパやアジアですでに戦争が始まった時期に書かれた作品である。日本に拡がった戦争の恐怖が民喜をも襲つたことが、この彼の作品からよく読み取れる。しかし、上で意図的に長く引用した断片を見ると、爆撃を思わせる描写とその後の景色は、まるで広島の日8月6日の惨劇を体験した人が書いたように感じ取れる。例えば、色の感覚はとても激しい。「もつと青いもつと深い空」に、「嚇と真赤な牡丹の花」が「真黒な煙」を出している。次に「黄色なガス」が出てくる。周りは激しい変化を起こしている。「生えてゐる草」は「真白に枯れて」、灰色になってしまう。人間の悲劇は描いていないが、自然は「みんな骸骨になつてゐた」。この描写がものの形、音、色、動きなどをはっきりと表出していることによって、周囲の悲劇の恐ろしさはより強烈に強調されているのである。民喜のこの戦前に書いた物語を読むと、戦後の作品に描かれた原爆投下の跡の景色と全く同じような光景を連想させられる。この爆撃のようなシーンの後、急に全部が暗くなり、静かになっていた。壊れてしまった自然は、今度は人間を脅す。闇の中で「今居る場所がやはり狭い暗い墓の中らしい」というように感じられて、恐怖で動けなくなった。死んで棺に閉じ込められたような感覚である。出口はない。

先に引用した戦前の短編を戦後の短編に比べると、文体と作品全体の雰囲気はほとんど変わらない。さらに苦しい経験を多く積んだということはあるが、恐怖感、不安感に襲われて、当惑した人間の姿は民喜の全部の作品に登場している。「人間存在の不安」という論題のテーマ、特に極端な状況に置かれた人間の不安を考える時に、民喜の作品は最適な例であると思われる。彼の主人公たちがいつもこのような状況に置かれているからである。

戦後の作品を分析する前に、もう一つの<予言的な>短編に注目したい。1937年5月号の『三田文学』に、民喜は「幻燈」という短い作品を発表した。1934年の春に検挙された事件に関連すると思われるこの短編には、暗示語が多く、それぞれの場面に互いにつながりはなく、因果関係も非合理であり、また語り方は夢幻の中の出来事のように断片的である。特に一つの場面に注意したい。先に論じた「曠野」のなかに人類の破滅を予感するような場面があった。その場面に似ている場面が「幻燈」でも現われる。その短いシーンは昂という主人公が犬と戦っていることを描いているが、きわめて象徴的な描写であると思われる。次のような文章は、広島に原爆が投下された直後の状態を連想させる。

47 『定本原民喜全集』一卷、青土社、1978、p.230.

真白な河原の砂に月の光が幽霊のやうに燃えてゐる。と、その砂のなかを犬の眼に似た水が音もなく流れてゐた。水がぼうつと、一ヶ処燐光を放つた。次いであつちからも、こつちからも焰が生じて、もう川は真赤な火の流れであつた。それがずんずん昂を目がけて流れて来る。⁴⁸

太田川に洗われている広島の前には8月の厳しい太陽の光が砂を燃やしているように暑い。爆音の描写は一切ないが、もうすでにあちらもこちらも「真赤な火の流れ」が出てくる。火事が広がっている。

やがてこの真赤に煮え滾るところの液体が昂を襲つた。彼の鼻腔や耳にまで熱気は侵入し、煙が全身から立昇つた。今焰の洪水のために、昂はもう犬の歯から押流されてゐた。轟々と唸る火の渦に巻込まれながら、猶ほさまざまの火の姿が昂に戯れて来た。硫黄や砒素などの恨しさうな火の玉が来ると、昂の内臓は破壊に脅え、顔は断末魔の形相を湛へるのであつた。⁴⁹

主人公は犬に象徴される敵軍の爆弾に脅えている。犬の歯がいきなり焰や火の渦に変身したりするので、昂は何と戦っているのか急に分からなくなる。感じるのは、形成されていない存在が彼の命を奪おうとすることだけである。

4. 結

ここで論じた『死と夢』と『幼年画』から選ばれたいくつかの短編は、特に予言的な意味で重要な作品である。「曠野」からの「嚇と真赤な牡丹の花」、また「幻燈」からの「轟々と唸る火の渦」「恨しさうな火の玉」などの表現は、民喜が戦後に描いた原子爆弾の光とキノコの形の雲を連想させるのである。1937年-1941年の間に書かれた作品は、家庭内の不安や幼年時代の不安だけでなく、やはりその時代に世界中で次第に広がっていた不安も反映している。しかし、戦前に発表されていたこれらの作品が数年後に広島・長崎に起こる惨事を予言するほどの作品であつたとは誰も想像していなかつた。さらに、30年代の<幻想的不安>は、戦後の作品においては<現実的不安>になった。そして、戦前の民喜の作品に描かれた身内の悲劇は、戦後になると、一般の人々の悲劇にまで広がっている。作家個人の苦しみは、敗戦に終わった第二次世界大戦による普通人の苦しみと重なっていった。

参考文献：

- 『定本原民喜全集』 一巻、青土社、1978。
二巻、青土社、1978。
三巻、青土社、1978。
別巻、青土社、1979。

原民喜『夏の花・心願の国』、新潮文庫、1973。

川西政明『一つの運命—原民喜論』、講談社、1980。

48 ibid. p.152.

49 ibid. p.152..

小海永二『原民喜—詩人の死』、国文社、1984.

黒古一夫『原爆文学論—核時代と想像力』、彩流社、1993.

黒古一夫『原爆のことば。原民喜から林京子まで』、三一書房、1983.

仲程昌徳『原民喜ノート』、勁草書房、1983.

『原民喜詩集—日本現代詩文庫100』、土曜美術社出版販売、1994.

『原民喜資料目録（稿）』、広島市立中央図書館、1994.

Abstract

Hara Tamiki - the Prewar Silhouette of the Author of Atomic-bomb Literature

Urszula STYCZEK

In this article I intend to discuss the prewar life and literary activity of one of the most famous writers of atomic-bomb literature, Hara Tamiki. Unlike such famous writers as Oe Kenzaburo and Ibuse Masuji, who wrote about the atomic tragedy in Hiroshima, despite not having experienced it, Tamiki became famous worldwide due to one short novel, *Summer Flowers*, which was published by 1946, and which was based on his own experience. The novel was a complete account of a reality that surpassed anybody's imagination. However, Tamiki actually wrote some similar fictional stories before the Second World War, being in some way a prophet of the coming war. His characters are often put in extreme situations, facing death or incurable sickness, searching for the real meaning of life and death. The anxiety of human existence was the main theme of his prewar writings. Also, we can deduce from his works how influential his beloved older sister, Tsuru, was. She was a Christian. Tamiki himself never became a Christian believer, but her existence is perceptible in his works. I shall analyse a few of his writings in which we can find all the elements mentioned above. These include *Flames* (Hono), *Christ* (Kirisuto), and *Prairie* (Koya).